

「人と建築物と海」の関係からみた海景観賞の型に関する研究

一 (その12) 昭和初期の名所案内記を事例として一

正会員 ○寶泉 立夫*1
同 横内 憲久*2
同 岡田 智秀*3
同 宮田 香奈子*4

ウォーターフロント 海景 3要素
海景観賞の型 名所案内記 土地利用

1. 研究目的—ウォーターフロントにおいて「建築物」は、その操作性の高さから、「広大な海」といった海域特有の景観(以下「海景」)を観賞する視点場や、「海景」の一要素として寄与でき、当該空間の魅力を高めることができよう。こうした観点から先行研究¹⁾では、大正期の東京の名所案内記を対象として、「人」「建築物」「海景」の3要素で構成される「海景観賞の型」とその変容状況を分析し、大正期においては江戸・明治期にみられた6つの「海景観賞の型」*¹が消失したことを捉えた。そこで本稿では、震災復興を遂げて芝浦棧橋が建設される(1932年)など、海辺が近代化した²⁾昭和初期(1926年~1945年)の東京を対象として、当時の「人」「建築物」「海景」からなる「海景観賞の型」を明らかにし、江戸・明治期から大正期までに変化がみられた「海景観賞の型」の昭和初期における変容状況を把握することを目的とする。

2. 研究方法—昭和初期における「海景観賞の型」の分析にあたっては、東京都立中央図書館*²の蔵書より、「新興東京名所」³⁾をはじめ、当時の東京の名所を編集・刊行した名所案内記^{4)~19)}の原著を分析資料(表-1)として、3要素が同時に含まれる写真(事例)を選定する。次いで各事例の解説文や写真の題名(主題)から、3要素の関わりが読み取れた事物を取り上げ、それらを類型化することで「海景観賞の型」を明らかにする。そして分析資料に掲載された写真構成要素を項目別に抽出・整理し、江戸・表-1 分析資料とした名所案内記の編纂理由

文献名(全17文献)	編纂理由
新興東京名所 ³⁾	東京市全15区の名所・史跡などを載せた
大東京写真帖 ⁴⁾	震災後に整備された東京を編集した
大東京写真帖 ⁵⁾	震災後に整備された東京を編集した
大東京名所写真 ⁶⁾	東京市における神社・仏閣・史蹟・公園・眺望・建築・橋梁等の著名なるものを選定し編集した
大東京写真名勝案内 ⁷⁾	遊覧・交通案内を収録・編集した
大東京史蹟名勝地誌 ⁸⁾	東京に残る史蹟名勝天然記念物を編集した
大東京の史蹟と名所 ⁹⁾	東京府下及び隣接地における史蹟名勝天然記念物や著名な神社・仏閣・史蹟名勝などを網羅した
東京都史蹟名勝天然記念物調査報告書 ¹⁰⁾	東京都の史蹟名勝天然記念物を紹介した
大東京と近郊 ¹¹⁾	小学校の遠足を実施するために、候補地を調査し、解説を加えて編集した
東京百景写真帖 ¹²⁾	
大東京名所繪はがき集 ¹³⁾	
繪葉書帖 ¹⁴⁾	編纂理由についての明記はないが、その書名から東京の見所・名所を案内する書であることが理解できる
新版大東京案内 ¹⁵⁾	
大東京名所百景写真帖 ¹⁶⁾	
大東京百景写真帖 ¹⁷⁾	
大東京写真帖 ¹⁸⁾	
東京名所案内 ¹⁹⁾	

明治期の「海景観賞の型」を構成する事例と比較することで、その変容状況について考察する。

3. 結果および考察

(1)「海景観賞の型」—以上の方法に基づいて分析を行った結果、全分析資料(17文献)に掲載された写真1,734事例中には、「人」「建築物」「海景」の3要素を同時に含み、それらの関わりが読み取れた「海景観賞の型」は存在しなかった。そこで以降は、3要素の関わりが読み取れた事例が皆無となった要因から、「海景観賞の型」の変容状況について考察していく。

(2)「海景」を観賞できる名所—前項の結果から、ここでは当時「海景」を観賞できる名所が存在していたのかを捉える。その方法としては、分析資料とした昭和初期の名所案内記から、海を含む写真と海に関する記述を抽出し、それら両者から「海景」を観賞できる名所を把握する。

以上の結果、分析資料から海を含む写真は全1,734事例中21事例(表-2)、海に関する記述は219記述捉えられた(表-3)。まず、海を含む写真21事例をみると、「人」が岸壁を行き来しながら停泊する船舶(海景)を観賞している「芝浦棧橋」(写真-1)や、港湾空間に存在する景物が含まれている「芝浦の岸壁」(写真-2)のように、「港湾施設」を含む写真が計16事例存在していた。続いて海に関する記述219記述をみると、「地勢」「眺望」「港湾」の順に記述が多い。このうち「地勢」「眺望」は、当時の名所が「海」に臨むことやその一望性により特徴づけられていたことを示している。また、「港湾」は「我が国の大貿易港である¹¹⁾」と記述されるなど特定の事物が興味の対象になっていたが、先の「眺望」では「山から港内を眺望する景色もよい¹⁵⁾」という記述も含まれていたことをふまえると、「港湾」自体が「海景」として観賞されていたといえよう。

これらから、昭和初期においては、「海景」を観賞できる名所が存在しており、具体的な視対象としては「港湾景観」が主流であったといえる。だが、昭和初期において「建築物」を介した「海景」の観賞形態は存在しなかった。これ

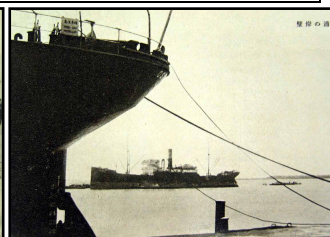
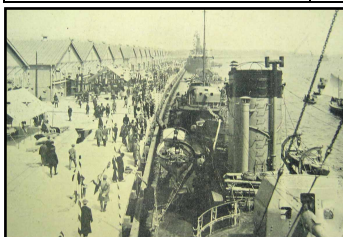


写真-1 芝浦棧橋³⁾

写真-2 芝浦の岸壁¹³⁾¹⁴⁾

写真-3 市政会館¹⁶⁾

写真-4 東京駅¹⁶⁾

A Study on Patterns of Ocean View by Relation of Person, Architecture and Ocean
(Part.12)Using Meisho-Annaiki of early in Showa Era as Examples

HOSEN Tatsuo et al.

